

渡辺公観さんの思い出

加 藤 徹

光陰矢の如し。

渡辺さん、否、公観（こうかん）さんとの長いお付き合いも、もう彼方に行ってしまった。彼がこんなに早く逝ってしまうとは、思いもしなかった。

彼と初めて会ったのは、いつだったのか、どのような会い方だったのか、まったく記憶にない。彼の経歴を一覧すると、昭和44年（1969年）に助手として和歌山大学着任、45年（1970年）に専任講師、47年（1972年）に助教授昇任と記されている。私が和歌山に専任講師として着任したのが45年、助教授昇格が47年であったから、まさに同期の同僚である。年齢的には、社会人を経験した彼が2才年長ではあったが……その後私は27年、和歌山大学経済学部にお世話になった。その間、ずっと彼と一緒にあった。

当初は、あまり親しいお付き合いはなかったように記憶している。学問研究も彼がマーケティング、私が商法という、交わるところが少ない専攻分野であったことが大きな原因であったように思う。しかしある時期から、彼の方から私に近づいて来てくれた。若気の至りであったと今思えば恥ずかしい限りであるが、私が学部の運営方法（とくに教授昇格人事の基準の問題）で、当時の学部の指導的立場の先生方に楯突いたことが、彼の目にとまったようである。

その後、帰途が同方向であることから、とくに教授会が終了した後などに、夕食を共にする機会が多くなった。一杯飲みながら、その日の教授会の議論や学

部の進むべき方向など色々なことを彼と話し合った。

その場で彼と意見の一致をみたことが、多く学部運営に反映されている。細かいことは忘れてしまったが、ゼミ生の数（最大枠）とか、センター入試の科目の選択制であるとか、彼のユニークな発想が多く生かされたことは、事実である。とくにセンター入試の科目選択制が採用された年に、偏差値が旧帝大の東北大学の経済学部と並んだことは、今もハッキリ記憶に残っている。経済学部独自の入試制度が受験生から好評を得た証しだと思う。この制度は、あっという間に他大学に模倣され、和大的特徴としては持続しなかったことも、逆に発想の良さの証明だとも言い得るであろう。

システム工学部の設置に際しては、経済学部が多大の協力をした。教員の定員数 20 名（平成 6 年 10 月 12 日人事教授会決議）、学生数としては、1 学年の定員 120 名を、新学部差し出した。教員数・学生数が大幅に減少し、経済学部としては、それまでの 4 学科を 3 学科に再編しなければならない事態が生じ、私が学部内の検討責任者に任ぜられた。経済学科・経営学科（当時）ともう 1 つの学科を何にするか。試行錯誤をした後、結局、新学科は、公観さんのマーケティングその他の経営の科目と経済の科目および法律科目を中心とする「市場環境学科」に落ち着いた。彼が、その時に示してくれた案が、結局学部内の大多数の賛成を得て、その後文部省（当時）の了解も得ることができ、現在の経済学部の形態が決まったのである。彼の協力そしてアイディアが実に有り難かったことは、今も心に焼き付いている。

この頃から、文部省に通うことが多くなった。その後現在に至るまで、高等教育局の官僚とのお付き合いが続くことになる（当初は官々接待も行ったが、世間の批判を浴びてすぐ自粛に追い込まれたのも懐かしい思い出である）。私事にわたって恐縮であるが、この時の文部省人脈がその後実に役に立った。関西学院に移籍した直後、降って湧いたようにわが国でロースクール構想が持ち上が

り、関学が慌ててロースクールを立ち上げる際にも、この人脈にどれほどお世話になったかわからない。この人脈があったから、電話一本で、普通では難しい大学課長とのアポイントメントがとれ、他大学に優先して種々の情報を入手することができた。和歌山大学に深い謝意を示すとともに、そのきっかけを作って頂けた公観さんにも、感謝の気持ちを捧げたいと思う。

* * *

公観さんは学生からとても慕われた教員であった。彼と私の研究室は、高松時代は離れていたが、栄谷キャンパスでは、経済学部棟の3階で隣り合わせであった。お互い、時間が空けばお互いの研究室に出入りし、彼の部屋では、お茶やお菓子、夕方暗くなればワインのご馳走になった。

彼の研究室には、絶えず学生が出入りし、その人気の高さがうかがわれた。彼のゼミへの志望者も常に定員を越えていたし、授業も、マーケティングという科目の特性を最高度に発揮する、映像と大音響を駆使した、当時としては最先端のものであり、そのような機器と教材を駆使する能力を彼は十二分に持ちかつそれを駆使していた。

学生が大挙して受講している様子を、半ば羨ましく半ば尊敬しながら眺めていたことも懐かしい思い出である。講義時間が重なっていたことから、ついに彼の授業を見学する機会を得ることができなかったことも、今になれば、残念である。研究室は、書物ばかりの私の部屋と異なり、映像機器がずらりと並べられていた。

また彼の車に対する造詣と愛情も、特筆すべきものであった。ドイツ車（フォルクスワーゲン）・フランス車（シトロエン）、そして日本車を同時に所有し、これらを乗り分け、堺からの通勤は常に車であった。同時期に経済学部のスタッフであった津田秀雄教授と私は、お互いの時間が合うときは、ほとんど彼の車で、大学から堺の地下鉄まで送ってもらっていた。その間1時間余り、車中で、大学

のことから個人的なことまで、いろんなことを3人で話し合った。実に多くのことを彼から教えられた。このようなことは、私の人生で他には存在しない。

いつの夏休みだったか、定かではないが、やはり3人でドライブをした懐かしい思い出がある。三重県の近くまで走り、「針」という所で焼き肉を食べて帰って来た。この時も彼の車に乗せてもらった。また私のゼミ旅行は車を使うものであったが、ある年旅行の第1日目に彼がふらっと現れ、1日間一緒に走り回ったこともある。

私の車好きも、彼からの影響が極めて大きい。彼が話してくれた、ドイツ人の車（ベンツ）への接し方（「乗り潰すまで乗る」）にも、影響を受けた。また彼がヨーロッパで車を自由に乗り回していたことは、私に決定的な影響を与えた。

私の専門がフランス商法ないしフランス会社法、及びEU会社法であるため、フランスに行くことが多い。その際私は、日本でフランス車（新車）の購入契約を締結し、ド・ゴール空港に着いたら、空港で新車を受け取り、荷物をトランクに載せて走り出すのであるが、この方法そのものは私が発見したものであり、彼の模倣ではない。しかしこういう方法を発見するに至ったその動機ないし原因は、彼のヨーロッパでの生活スタイルに触発されたものである。

彼と会わなければ、こういうやり方を探すことはしなかったであろうし、結果として見出すことはできなかったであろうと思う。ちなみにフランスで購入した新車は、フランスで売って帰るので、費用としてはその差額だけを用意し、支払えば良いのである。レンタカー並の費用しかかからない。

公観さんは、人生の達人であった。自己の価値観を最優先し、世俗的な事柄にはほとんどと言ってよいほど興味を示さなかった。フランスやドイツの文化に深い興味を示し、絵画やクラシック音楽についての造詣にも深いものがあつた。DVDが市場に出たとたんに、一般世人に先駆けて買い求め、オペラを楽しんでいたことも、印象的である。

ヨーロッパにも、私などのように大騒ぎして出かけるのではなく、いつの間にかいなくなり、いつの間にか目の前に現れるといった様子であった。何年前だっ

たか、夏休みが猛暑で日本全体が音をあげていた年があったが、秋口にふらっと現れた彼が「徹（てっ）ちゃん！ 今年は日本は暑かったそうやな。」と言いつつ言葉は、今も耳の底にハッキリ残っている。

「一緒にフランスで夏休みを過ごそう。」と随分前から誘われていた。「ダヌシー湖（スイスよりのフランス南東部の湖）のほとりで1週間、ボケーッとしようや。」と言われたこともある。しかし私の方の都合から遂に実現することなく、彼は逝ってしまった。残念でならない。

彼がこれからやってみたいと言っていたことがある。「地中海に沈む夕日を追いかけて車を走らせ、日が沈んだら宿を探してそこで寝る。そうやってスペインまで行って見たい。」と。ロマンのある夢だと思う。彼がこの夢を実現したのかどうかは、聞いていない。実現したのかも知れない。しかし、彼の言葉を何度も聞くうちに、これは私自身の夢にもなってしまった。

* * *

和歌山大学の教員生活を、3人で楽しんでいたとき、突如、衝撃が走った。親しかった津田教授に近畿大学経営学部から声がかかった。津田さんの個人的な都合もあり、和歌山から去られることになった。私自身にも大きな打撃であり、公観さんのショックも大きかったと思う。

その2年後、今から10年前、今度は私に関西学院法学部から、移籍の声がかかった。呼んで下さったのは、私の尊敬する商法専攻の大学の先輩であり、その方は、関学で6年間私の人事を進めて下さっていた。

受けるべきか否か。私も相当悩んだことを記憶している。しかし自宅が遠く（神戸市）、年齢的に和歌山への通勤が相当負担になっていたこと（これは宝塚市在住であった津田教授も同じであったと推察する）、それと法律を専攻する以上一度は法学部で教鞭をとりたいという気持ちを捨てられなかったことが、決定的になった。

移籍を決めても、それを伝えれば公観さんを随分傷つけるであろうと思うと、公観さんにそれを話すことができなかった。結果としてどうせ彼を裏切るのであれば、1日でも彼が知るのが遅い方が良い。そう思いながら、心で詫びながら、1日々々を過ごし、遂に彼に打ち明ける日が来たことを、明瞭に記憶している。

お互いが定年退職をし、またゆったりと会いたいと楽しみにしていたところ、経済学部の大道さんから、公観さんの病状が悪いとの連絡が入った。すぐ行かなければ、と思いながら、研究科長（ロースクール長）の職務と教材作成・授業準備で精一杯であった私は、時間を作れず、お見舞いができなかった。慚愧に堪えない。

公観さんに心から詫びながら、最後に、公観さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

（了）